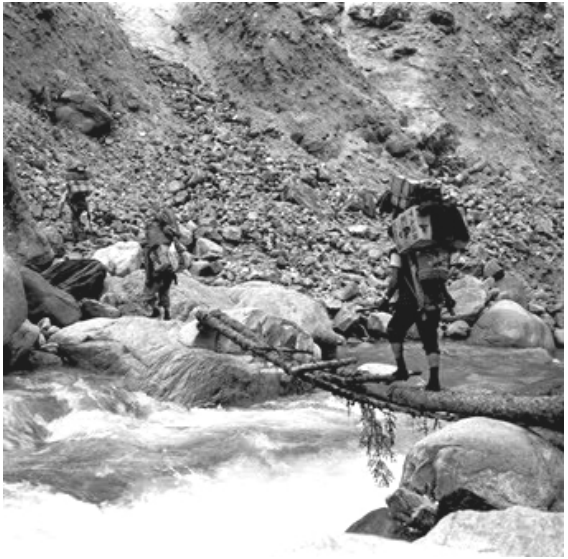
旧友と辿った思い出の山旅（伊藤新道



今や「北アルプス・幻の古道」と呼ばれる伊藤新道。

一九六一年、保田君と僕の二人は、北アルプス最深部へのルートとして脚光を浴びている新道に取り付いていた。

伊藤新道は、その取り付きから湯俣川と併走した。渓流のしぶきを浴びるほどの川面の直ぐ上に丸太を組んだ小さな吊り橋を数か所、右岸、左岸と巻くようにして高度を上げた。しかし北アの秘境と云われて新登場したその貴重な景観の記憶は薄く、岩石が累々とし、ところどころで硫黄だろうか噴気を発していた程度のただぼんやりとした印象しかない。まだ山に慣れず急登個所もあって、早くもバテていたのだ。勿体ないことをしたと思う。

やがて、道は狭く谷あいはかなり深くなって、より慎重を要する険しい傾斜面に造られた登山道となっていた。この日はまだ登山者の姿がなく、そこには保田君と僕ら二人の汗とあえぎがあるのみで

あった。

今や幻の古道・伊藤新道で、あわや！

ふと、下山して来る足音に気が付いた。この日初めての人影に、先頭を行く僕があわてて道を譲ろうとした時だった。

狭い登山道を開けようと、僕が背負ったザックを谷側寄りに身体をひねった一瞬、足が滑ってバランスを崩し、谷側の斜面に身体が飛び出しそうになった。足元のザレ場（岩屑が大きめのガレ場に比べて細かくなった小石や砂状のところで、足が滑って歩き難し）に砂ぼこりが立った・・・

咄嗟に、腰を低く落として片方の脚を斜面下方のどこかに引っかけて踏ん張った。すぐさま誰かが手を差し伸べて引っ張り上げてくれた。誰の手であったのか？当然ながら礼を尽くしたと思うが、すっかり意識が飛んだようになって覚えが無い。

道は狭かったが、ノコギリ歯の急峻な岩場でもなく何ら危険なところに見えないにも関わらず、こんな目に会う。ある友人の話の通り、何でもないところにも油断があれば遭難につながると云っていたが、今回の油断は、背負ったザックにあったと思う。

パッキング（荷物類の詰め込み方）が問題だったのだ。ザックは、当時スイスに由来するキスリング形式、明るい茶色一色で無地、両脇に大きなポケットが付いて幅広になるリュックサックで当時流行った。その幅広のまま使用して狭いところでの使用に適さない格好にしてしまったのだ。山の運び屋・歩荷（ボッカ）が背負うように縦長にしなければいけなかった。工夫すれば幅広を縦長にもできた僕のパッキングに問題があった。

情けなかったが、恐怖でしばらく足の震えが止まらない。下方はもう怖くて覗けない。

何十年も経った今もなお、忘れられない恐怖の体験となった。

それにしても、運動神経が無く重いザックを背にした痩身の僕がよくぞ踏ん張ることが出来たものだと思う。

滑落したら、先ず今の僕は無い。

しばらくは、そのシーンが頭から離れず、原生林へ踏み込んで初めて我に返った。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

昭和三十六年、大学三年二十一歳の夏。北アルプスのほぼど真ん中に位置する三俣蓮華岳（みつまたれんげだけ・二、八四一メートル）を起点に、稜線を伝って槍ヶ岳を目指そうというプランを立てた。

そのルートを計画したきっかけは、北アの最深部と云っていい黒部源流に最短で入り込む新登山道「伊藤新道」があるという情報を知ったからで、そこを使えば、北ア最深部の入山に従来二日はかかったところが一日に短縮され、北アルプスの背骨にあたる稜線から憧れの槍ヶ岳を遠望しながら近づける雄大な山旅が愉しめるはずと思ったことである。

小学校以来の親友で小田高当時２組の下赤君と松岡君、柳川と同級の５組・保田君ら四人で入念な準備をした。しかし、間際に下赤君が体調を崩す事態となった上、松岡君も不都合が生じて結局保田君と僕ら二人の出立となった。

テントや自炊用具、十日を超える食料を二人で分担しても、ザックは各々三十キロ弱はあったろうか、日頃運動部員のようなトレーニングと無縁な僕らには、とても一人で地面から立ち上がるには無理な重装備で、休みのたびに手を引っ張り揚げてもらうことになる。特におよそ筋肉らしきを身にまとっていない痩身の僕には今後の体力が持つか甚だ不安であったが、下赤君と松岡君ら残留組の見送りを背にきりりと前を向いたのであった。

小田急線の小田原駅から新宿駅を経由し中央線で信濃大町に向

かったのは、八月初旬。

そこからはバスで三俣蓮華方面に入山できる新ルート伊藤新道の起点・湯保温泉に入って一泊し温泉に浸った。明日はいよいよ山に取り付く。

そして、伊藤新道で冒頭のような飛んでもない体験をする羽目になったのである。

なお、作家・森村誠一さんの山岳小説「虚無の道標」は、新道に多額の費用を投じて切り開いた三俣山荘のご主人伊藤正一さんの開発秘話がベースになっている。伊藤さんも山岳書のベストセラー「黒部の山賊」（山と渓谷社）の著者で知られ、森村さんとともに伊藤新道を歩いている。

残念ながら、伊藤新道はその後のダム開発による地盤の崩落や亜硫酸ガス発生の影響を受けてバス路線も廃止され、昭和五〇年代には廃道となってその痕跡も途切れ、知る人ぞ知る秘境への隠れ道として記憶の中に残るのみとなった。

以来、いつかは挑戦したい憧れの場所、幻の古道、北アルプスのラストフロンティア、北ア登山者の流れを変えた伊藤新道などと、復活を望む声が高まるばかりとなった。

そしてついに、近年になって北アルプス愛好家の間でこのルート復活の動きが具現化し、再開にこぎつけたとする報道があった。

（続く）

※文中には、留守居役を余儀なくされた下赤君の怨念が僕の手を遠隔操作、改訂が随所に及んだ。冒頭の写真のサイズ、あわや滑落のシーンの描写、山岳名の振り仮名などなど。（感謝）